



秋田地区営農センター 主任 **中川 喜樹**

幼穂形成期(7月15日頃)や減数分裂期(7月25日頃)は幼穂が伸長し、籾数・千粒重に影響を及ぼす、もみ殻の大きさが決定する時期であるとともに、倒伏に影響を及ぼす下位節間が伸長する時期でもあります。このため、穂肥は適期に適量を散布することが重要となります。

## 倒伏させない追肥

葉色が淡いから追肥を行うと、倒伏につながる可能性が大きいので、追肥は十分に考えてから行いましょう。また、出穂期に近い追肥はタンパク質が高くなり、食味低下につながりますので行わないようにしましょう。幼穂形成期の追肥については草丈、葉色を見ながら行うようにしましょう。

※営農指導員によるスパット巡回を活用ください。

## 幼穂形成期(7月15日頃)「あきたこまち」の場合

- ・幼穂長2mm、葉齢11葉
- ・基準量10aあたり 窒素成分量1kg

**肥料例**

- ・ニュー穂肥34号 (15<sup>N</sup>-4<sup>P</sup>-15<sup>K</sup>) 現物投入量約7kg/10a
- ・NK化成404 (14<sup>N</sup>-0<sup>P</sup>-14<sup>K</sup>) 現物投入量約7~8kg/10a



## 減数分裂期(7月25日頃)「あきたこまち」の場合

- ・幼穂長5mm、葉耳間長±0cm
- ・基準量10aあたり 窒素成分量1.5kg

**肥料例**

- ・ニュー穂肥34号 (15<sup>N</sup>-4<sup>P</sup>-15<sup>K</sup>) 現物投入量約10kg/10a
- ・NK化成404 (14<sup>N</sup>-0<sup>P</sup>-14<sup>K</sup>) 現物投入量約10~11kg/10a

## 夏バテ防止にはケイ酸と窒素

ケイ酸の施用(中間追肥)は①根張りの促進による倒伏軽減②登熟向上による乳白粒軽減、食味向上③いもち病への抵抗性向上とカメムシ類被害の軽減。また、高温状況下では根の活力を高めることにより、養水分の吸収を活発にし、葉の蒸散が盛んになることで葉面温度を下げる効果も期待できます。

・けい酸加里プレミア34(投入量目安:20kg/10a、使用時期:6月下旬~7月上旬)



## 斑点米カメムシ対策

畦畔や農道、休耕田では雑草が出穂する前に草刈りを実施しましょう。

斑点米の原因となる「アカスジカスミカメ」は水田内のイネ科雑草の穂に誘引され、水田内に定着する特性があります。水田雑草のとりこぼしが多い圃場では後期除草剤の散布が必要となります。

### ●斑点米カメムシ類の雑草防除体系

|      | 6月  |   |   | 7月 |   |   | 8月        |     |           | 9月   |   |   |
|------|---|---|---|----|---|---|-----------|-----|-----------|--|---|---|
|      | 上   | 中 | 下 | 上  | 中 | 下 | 上         | 中   | 下         | 上  | 中 | 下 |
| 雑草処理 | 草刈りの徹底  |   |   |    |   |   | 草刈り禁止     | 草刈り | 草刈り禁止     | 草刈りの徹底   |   |   |
|      | 6月上旬から出穂10~15日前までに数回行う。ほ場内のイネ科雑草等の穂はアカスジカスミカメの発生を助長するので対策は万全に!! |   |   |    |   |   | [7/下~8/上] | ↓   | [8/下~9/上] | 収穫2週間前から行う<br>雑草の出穂を防ぎ、水田への侵入を抑制するため、本田に殺虫剤を散布した直後、草刈りを行う。 |   |   |